

「グローバル研究」の課題と 展望についての覚え書き

—ローカルの人やものと
その働きかけに焦点を当てる—

上杉富之

はじめに

グローバル化時代の社会と文化の動態をよりの確に捉える理論ならびに方法として、筆者らが「グローバル研究」(glocal studies)を構想・提唱して以来、すでに10年近くが経過した。この間、2008年10月には、グローバル研究を理論と実証の両面から推進する研究センターとして、成城大学民俗学研究所の下に「グローバル研究センター」を開設した⁽¹⁾。以来、筆者らはグローバル研究センターを拠点として、センター全体で取り組むプロジェクトを企画・立案して実施するとともに、センターに所属する研究員らも個別にグローバル研究ないしそれに関連した研究を精力的に実施してきた⁽²⁾。そして、それらの研究成

果をセンターの研究雑誌（『グローバル研究』）や和文・欧文・中文等の研究叢書、シンポジウム報告書、研究レポート、ワーキングペーパーなどとして随時刊行するとともに、センターのウェブサイト等でも公表してきた⁽³⁾。グローバル研究の成果は今や質、量ともにはかなり充実したものになったと自負する。

しかしながら、筆者らがこれまで行ってきたグローバル研究の成果と意義が高く評価される一方で、グローバル研究の理論と方法が必ずしも明確ではない、あるいは、これまで公開したグローバル研究の成果に十分なまとまりがあるとは言えないなどの厳しい評価も内外から寄せられている⁽⁴⁾。こうした厳しい評価に対しては、本来ならば、そうした批判に応じてグローバル研究の理論と方法そのものを再検討し、より明確な方向性を提示すべきであろう。実際、グローバル研究センターでは、そうした問題意識に基づいた国際シンポジウムを企画・開催し、それらの成果を盛り込んだグローバル研究の理論と方法に関する論文集を編集・刊行す準備をするなど、対応を進めている⁽⁵⁾。

ところで、グローバル研究の理論と方法を明確化する作業の一環として、筆者は最近、グローバル化（glocalization）そのものを題材とした初の研究概説書、ヴィクター・ルドメトフ（Victor Roudometof）著の *Glocalization: A Critical Introduction*（Routledge 2016）を読み直す機会を持った。本稿では、ルドメトフの議論を紹介しつつ⁽⁶⁾、それを筆者らの考えるグローバル化ないしグローバル研究と比較検討し、グ

ローカル研究の今後の課題と可能性を予備的に考察したい。

1. グローカル（化）をめぐる理論

近年、グローカル（化）という言葉ないし概念が地域おこしや地方創生等の文脈でますます頻繁に使われるようになってきている⁽⁷⁾。しかしながら、その意味内容は使う人や使われる時、場所、機会に応じてさまざまであり、政界や財界はもちろん、社会や文化のグローカル化にもっとも関心を持つ社会学や人類学等の学界においても必ずしも明確ではない（細谷 2017, Roudometof 2016:1-2）。

とは言え、1990年代初めにグローカル化という言葉ないし概念が学界へ導入されて以来すでに20年以上が経過し、その間、その言葉ないし概念をより効果的な記述・分析のツールとするためにさまざまな議論が展開されてきた。本稿では、ルドメトフの議論を紹介する前に、グローカル化に関する2つの有力な議論、すなわち、グローカル化というマーケティング用語を学界に導入したローランド・ロバートソン（Roland Robertson）の議論と、グローカル化の負の側面に注意を喚起しようとしたジョージ・リッツァ（George Ritzer）の議論を紹介しておく。

グローカル化という言葉ないし概念を最初に学界に導入したのはイギリスの宗教社会学者、ローランド・ロバートソンであっ

た。1990年代初めにかけて盛んになったグローバル化（globalization）に関する議論は、往々にして、グローバル化が世界各地の社会や文化を普遍化、同質化、均質化するのか、あるいは逆に、個別化、異質化、多様化するのかというような二者択一的な議論に終始していた。

普遍化、同質化、均質化の議論を展開する者は、グローバル化によって世界のすみずみに物質的な豊かさや自由と民主主義が広まるものと考え、バラ色の未来を描いていた。あるいは、それとはまったく逆に、ローカルの社会や文化がグローバル化の大きな波に飲み込まれて危機にさらされたり、場合によっては、それらが消滅したりするとして反グローバル運動を展開していた。一方、個別化、異質化、多様化の議論について論ずる者は、グローバル化によってローカルの社会や文化はしばしば大きな影響を受けるものの消滅せず、むしろより独自色を強調したり、混合・混成により雑種化・クレオール化したりして多様化することに注目した。

こうした議論、特に、グローバル化が世界のさまざまな社会や文化を西洋型のものに普遍化、同質化、均質化するという議論に対して、ロバートソンはこの種の議論が事実と反していることを指摘するとともに、グローバル化にともなって普遍化や同質化、均質化と個別化や異質化、多様化が同時に進行すると主張した。そして、こうした現象・過程を表現する言葉ないし概念として、当時、日本企業が使用していた和製のマーケティング

ング英語 global localization（[自社製品を] グローバルマーケットに対応させて現地化する）を短縮して作られた造語 glocalization を学界に導入したのであった（Robertson 1991参照）。

学界導入時、あるいはその後も、ロバートソン自身はグローカル化を独自に定義することはしていない。ロバートソンは、以下のような、導入時点の新語辞典、*The Oxford Dictionary of New Words* による定義（見出し語はグローカル glocal）をそのまま使っている（Robertson 1991:28, 1992:173-174）。

「グローカル」(glocal)

ビジネス界の業界用語。グローバルであると同時にローカルであること。市場においてグローバルな視点を持ちつつも、ローカルな状況に合わせていること。「グローカル化する」(glocalize) という動詞としては、ビジネスをグローバル規模で展開しつつ、ローカルな状況や状態にも配慮すること。過程を表わす名詞としては「グローカル化」(glocalization)。(以下、省略)

(*The Oxford Dictionary of New Words*, 1991: 134)

ロバートソンがグローカル化という言葉ないし概念を学界に導入した際の問題意識は、グローカル化がグローバルに展開した普遍的・均質的なもののローカルな場における個別化・特殊化＝ローカル化であると同時に、ローカルで個別化・多様化し

た個別的・特殊なもの普遍化＝グローバル化であるという2つの側面を持ち、グローバル化に関する無意味な二者択一の議論を終了させることができるという点にあった（Robertson 1992：102参照）。従って、ローカル化とグローバル化は同じ硬貨の両面のように不即不離なものであって、それぞれを別個に論じることはできないということになる。

ロバートソンのグローバル化をめぐる議論に対して、グローバル化の負の側面を「マクドナルド化」（McDonaldization）と名付けて批判するジョージ・リッツァは、ロバートソンが導入したグローバル化が、実際にはしばしばグローバル化による均質化に他ならないことを指摘する。リッツァは、グローバル化に連続ないし連動して進行するグローバル化がたしかに異質化や多様をもたらす場合があることを認める。しかしながら、その反面、資本主義的な成長を達成するためのプロセスとしてのグローバル化によって、ローカルなものがグローバルなものによって圧倒され、同質化・均質化されることに注意を喚起する。そこで、こうした成長（growth）を目指したグローバル化（globalization）の一環としてのグローバル化を、通常のグローバル化とは区別して、リッツァは「グロースバル化」（grobalization: growth と globalization を合成して短縮）⁽⁸⁾という造語で表現した。

グロースバル化という言葉ないし概念は、グローバル化がグローバル化とローカル化の連続の正の側面に焦点を当てている

のに対して、負の側面に焦点を当てた言葉ないし概念ということができよう。換言するならば、リッツァは、ロバートソンが主張するグローバル化に連続ないし連動して起こるグローカル化を、異質化や多様化等の正の側面と、同質化や均質化等の負の側面に分け、前者をグローカル化、後者をグロースバル化と区別したのである。その意図は、グローバル化及びそれに連続、連動して起こるローカル化をグローカル化として対象化しようとするロバートソンの提案は認めるが、グローカル化と一括される現象・過程に負の側面が含み込まれていることを忘れるべきではないと改めて確認することにある。

2. グローカル化に関する「屈折理論」

(1) 「屈折理論」

冒頭で紹介したように、最近（2016年）、キプロス大学の社会学者ヴィクター・ルドメトフはグローカル化に関する初の研究概説書を著したが、その中で、ロバートソンやリッツァらの議論を中心にグローカル化をめぐる諸説を検討し、そうした議論の先見性や有効性を認めつつも、それらが総じてグローカル化を（グロースバル化も）あくまでもグローバル化の一部としか見ていない点を批判する。ルドメトフにとってみれば、グローカル化およびグローカル化をめぐる研究は今や質・量ともに充実し、独自の研究領域となるべきであるにもかかわらず、

それが十分に認知されていないというのである。

すでに述べたように、ロバートソンとリッツァのグローバル化やグローバル化、グロースバル化をめぐる議論は、グローバル化がローカルな場でローカル化すると考える点では基本的に同じである（ローカル化の際に多様化と均質化のいずれを強調するかによってグローバル化とグロースバル化に分ける点だけが異なっている）。また、両者ともにグローバル化とグロースバル化がグローバル化に連続ないし連動して進行するとみなす点でも同じである。グローバル化やグロースバル化の出発点ないし起点はグローバル化にある。その意味で、グローバル化はグローバル化に付随するものであり、グローバル化に関する研究もグローバル化に関する研究の一環として行われることになる。

これに対し、グローバル化に関する研究を独立した研究分野として確立することを目論むルドメトフは、グローバル化をグローバル化の一部ないしそれに連続・連動して進行するものとみなすものの、概念上、グローバル化から切り離すことを試みる。

ルドメトフはまず、グローバル化を以下のように定義する。

グローバル化とは、ローカルな場を通過する際に屈折した (refracted) グローバル化である (Glocalization is globalization refracted through the local)。

(Roudometof 2016:65)

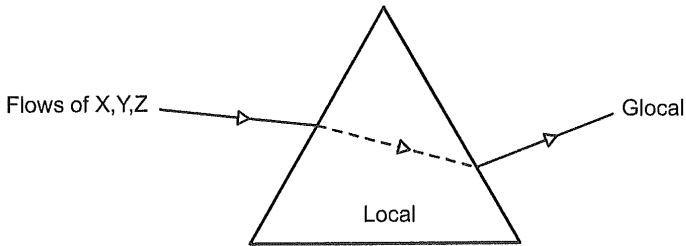


図1. グローカル化における「屈折」
 (出典：Roudometof 2016:65)

ルードメトフの定義では、音波や光波に関する物理学で用いられる専門用語、屈折 (refraction) が使われていることから、ここでは、この定義をグローカル化に関する「屈折理論」と呼ぶこととする。

ルードメトフは、グローバル化がローカルな場に到達してローカル化する様相は流体力学におけるような物質の拡散 (diffusion) ではなく、量子物理学における屈折として理解すべきだという。そして、グローカル化の屈折理論を、以下のような図で説明する (図1参照)。

ルードメトフは、X、Y、Zのようなグローバル化されたものや制度がローカルな場に到達する場合、それらはグローバルな場からローカルな場に入る際、あるいは出る際に境界面で「屈折」し、変化・変容すると考える。屈折理論によると、グローバル化はローカルなものを屈折させて変化、変容させるだけで

あるから、ローカルなものを吸収したり消滅させると考える必要はない。また、グローカル化はローカルなものに影響を及ぼしてグローカルなものに変化、変容させるものであるから、理論上、グローカル化は均質化とともに多様化も引き起こすことになる。そして、実際、異なったローカルな場で、異なった屈折が繰り返されて、異なったモノが生み出されることから、グローカル化は多様なグローカリティ（glocality、グローカルな状態）を生み出すことになる⁽⁹⁾（図2参照）。

グローカル化に関する新たな理論、屈折理論の提示に当たり、ルードメトフは、リッツァーが使う液状化や流動化といった液体や流体などの物質をイメージする言葉や概念を使わない。というのは、液体や流体等の物質の比喩は、グローバル化によって拡散したグローバルなものはローカルな場でグローカル化してローカルなものと同質化し、同質化ないし均質化してしまうというような議論に陥りやすいからだという。これに対し、グローカル化に関する屈折理論では、ものそのものの変化・変容を論じる必要がなく、現象ないし過程としてのグローカル化のみを扱うことができる。従ってまた、グローカル化、そしてまた、グローバル化が均質化と多様化のいずれをもたらすのかというような不毛の議論に陥ることも避けることができるという。

三七 ルードメトフのグローカル化に関する屈折理論は、これまでグローバル化とローカル化の連続ないし合成としてあいまいにしか定義されてこなかったグローカル化の現象ないし過程その

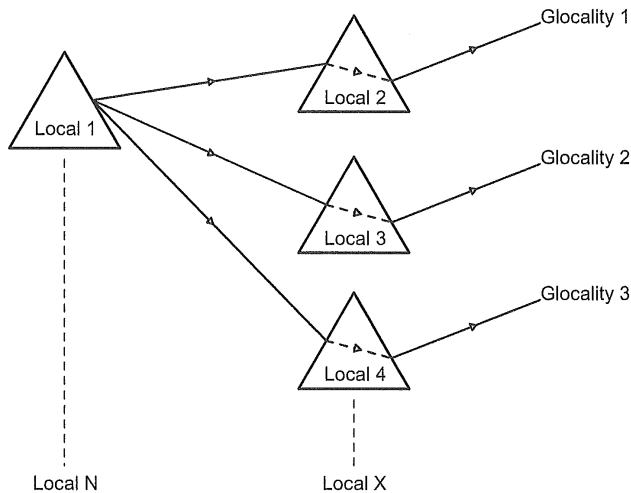


図2. グローカル化の繰り返しと多様なグローカリティの生成
 (出典：Roudometof 2016:66)

ものを改めて定義するという意味で重要なものである。また、グローカル化が、グローバルな場とローカルな場が接触する境界面において、そこに到達したグローバルなもの（あるいはローカルなもの）を「屈折」させて変化・変容させる現象ないし過程であることを明確にしたという点でも重要である。ロードメトフの屈折理論はやや抽象的かつ分析的だが、そうであるからこそ、分野や領域を超えて適用可能であるという利点を持つ。そして何よりも、グローカル化の現象ないし過程そのものを、グローバル化やローカル化の現象や過程とは別個に、自立

的なものとして扱うことを可能にするという意味でも重要である。

(2) 「グローバル研究」への展開

以上のごとく、ルードメトフはグローバル化を光の屈折にたとえて定義したうえで、こうしたグローバル化に焦点を当てた研究を「グローバル研究」(global studies)として構想する(Roudmetof 2016:141-145)。ルードメトフはグローバル研究の具体的な事例を提示していないが、グローバル化に焦点を当てるグローバル研究の特徴を、グローバル化に焦点を当てるグローバル研究(global studies)と対比させて、表1のごとくまとめている(表1参照)。

グローバル研究においては、グローバル化は、グローバルなものに対するローカルなものとの統合や対抗、抵抗(グローバル研究の見方)としてではなく、グローバル化とローカル化が相互に影響や作用を及ぼす現象ないし過程とみなされる。そして、グローバル化を通して生み出される文化は、グローバルなものがローカルなものを圧倒したり消滅させたりする(グローバル研究の見方)ものではなく、グローバルなものとのローカルなものが融合、混合して新しいものが創出されると考える。また、

表1. グローバル研究とグローカル研究

項目	グローバル研究	グローカル研究
グローカル化の位置付け	全体への統合を重視（すべてを覆うものとしてグローバル化を想定）	相互に影響を及ぼす点を重視（グローバル化の限界を認識）
グローバルとローカルの関係性	対立、抵抗、力関係	相互規定性、相互作用、改革指向
文化動態における特徴	グローバリ化、アメリカ化、文化帝国主義	グローカル化、雑種文化、創造的な流用
空間（space）と場所（place）の位置付け	物流空間と場所空間との対置、絶対的、地理的な空間	空間と場所の対立の統合、新たな場所や新たな相対的・社会空間の創出

（出典：Roudometof 2016:143）

変容するものとする。言葉を換えて言うならば、グローカル研究は、グローカル化やグローカル化を通して生み出される文化、グローカルな状態にある社会について、上に挙げたようなより柔軟で動的な捉え方を可能にする理論と方法を提供するものと言えよう。

（3）「グローカル民族誌」

グローカル研究を具体化するものとして、ルードメトフは以下のような「グローカル民族誌」（glocal ethnography）の試みを紹介している（Roudometof 2016:38-40）。

社会や文化の動態に関する研究をする者にとっては、人やも

の、情報等が大規模かつ迅速に移動するグローバル化時代の現代にあって、現実の生活に根ざした民族誌的情報をいかに的確に収集するかということが重要である。というのも、人や文化が国境を越えて不断に移動・拡散するようになった今日、比較的定住的な集団を想定したこれまでのフィールドワークの手法がもはや適用できないからである。

こうした流動的な状況での確かな民族誌的情報を集めるには、方法論的に3つの対処法が考えられる。一つ目としては、研究対象の規模や範囲をグローバルレベルまで引き上げた「グローバル民族誌」(global ethnography)の手法を採用することが考えられる。二つ目として、複数の場所で同時に調査を行う「複数地点の民族誌」(multi-cited ethnography)、そして、三つ目として、特定の地域や現象に関してグローバル化とローカル化の双方を同時に見据えた「グローバル民族誌」も考えられる。

これら3つの民族誌的研究、特にグローバル民族誌と複数地点の民族誌的研究は、実は、国際関係論や社会学、人類学分野の研究としてすでになりに精力的に行われている。しかしながら、グローバル民族誌については、グローバル民族誌等の一環として行われているにすぎず、まだ意識的に行われてはいない。

ルードメトフが紹介するグローバル民族誌の提唱者、ノエル・B・サラザール(Noel B. Salazar)は、グローバル民族誌を次のように特徴づけている。すなわち、グローバル民族誌とは、特定の集団または機関に見られるグローバル化とローカル化の

相互作用の実態、特にグローバルあるいはローカルな要素が人びとの行動に及ぼす影響や行為主体（agency）の働きかけによる変化の様相に関する情報をフィールドワークの手法を通して収集し、一つのまとまった記述を作成するものである（Salazar 2010）。

3. グローカル研究

（1）グローカル化の定義

人類学を中心にしてではあるが、筆者はこれまで繰り返し、グローバル化に焦点を当てたグローバル研究には潜在的に限界があり、それを乗り越えるためにはグローバル化とローカル化の双方を射程に入れた「グローカル研究」（glocal studies）を構想し、実施することが必要だと論じてきた（上杉 2009a、2009b、2011a、2011b、2012、2014、2015、2016a、2016b）。詳細については拙稿を参照していただきたいが、その要点は以下の通りである。

グローバル化に伴うさまざまな現象の実証的かつ理論的な研究であるグローバル研究（global studies ないし globalization studies）には、少なくとも以下の点で、潜在的だが根本的な欠陥がある。すなわち、グローバル研究には、①グローバル化の「中心」（起点）としての西洋諸国から「周縁」（到達点）としての非西洋諸国（ローカルな場）への一方的な影響を強調する傾向

があり(「力」の非対称性)、②往々にしてローカルの視点を欠き、その結果、③社会や文化についてみると、「中心」と「周縁」の間の変化や変容の同時性や相互作用性を見過ごし(「眼差し」の非対称性)、従ってまた、④雑種化やイノベーションなどによる社会や文化の再構築や多様化などという変動の実態も十分に評価することができない欠陥があることを指摘した。要するに、グローバル研究は潜在的にグローバル化の中心と周縁の間の「力」の非対称性と「眼差し」の非対称性に基づいた研究であり、グローバル化現象ないし過程全般を研究対象としようとするものの、研究枠組みグローバル化そのものについても必ずしも的確に記述、分析するものではないということである。

加えて、非西洋社会を中心としたローカル(地方や地域)の人びとの視点を重視し、強調する人類学や民俗学等の研究者が行き過ぎたグローバル化に反対するあまり(反グローバリズム anti-globalism)、グローバル研究そのものを忌避する傾向にあったことも大きな問題であった。

筆者の立場は、グローバル研究の理論と方法には確かに是正すべき点が多々あるものの、グローバル化の進行や浸透は厳然たる事実あって無視できるものではなく、従って、人類学や民俗学も積極的にそれに取り組むべきだというものである。ただし、人類学や民俗学がグローバル化の研究に取り組むに当たっては、グローバル化に加え、グローバル化に連続、連動して進行するローカル化にも焦点を当てるべきだと考える。また、ロー

カル化したものや考え方の再グローバル化 (re-globalization) や逆グローバル化 (reverse globalization)、あるいは当初のグローバル化とは異なった形のオルター・グローバル化 (alter-globalization) がごく普通に起こっている事実も研究の射程に入れるべきだと考える。

こうした観点から、筆者らは、グローバル化とローカル化をともに視野に入れ、また両者が同時かつ相互に影響を及ぼしながら進行するという事実を明示するために、社会学や人類学で1990年代初頭以降に使用されるようになったグローカル化の概念に注目し、その概念を以下のように再定義した。

グローカリゼーション (glocalization) とは、グローバリゼーション (globalization) とローカリゼーション (localization) が同時に、しかも相互に影響を及ぼしながら進行する現象ないし過程である。 (上杉 2011a:10)

(2) グローカル研究

また、再定義したグローカル化をキーワードとして、グローバル化とローカル化をめぐる社会的、文化的現象や過程に実証的かつ理論的に取り組むものとしての新たな研究を「グローカル研究」(glocal studies) と名付け、以下のように定義した。

<定義>

グローバル化とローカリゼーションが同時に、しかも相互に影響を及ぼしつつ進行する過程ないし現象をグローバル化と定義し、グローバル化の実態や効果・影響を実証的かつ理論的に明らかにする研究を「グローバル研究」と呼ぶ。

<目的>

グローバル研究を通して、今まで見過ごされてきた今日的な問題や課題をローカル(地域や地方)な視点から「対象化」(objectify)するとともに、著しく均衡の崩れた「中心」(欧米社会)と「周縁」(非欧米社会)の間の関係をローカルな立場から「対称化」(symmetrize)することを旨とする。

<意義>

グローバル化とローカリゼーションが同時に、しかも相互に影響を及ぼしながら進行するグローバル化の実態を明らかにし、ローカルな視点や立場を強調しつつ、より柔軟な社会と文化のあり方を提示する。

(拙稿 2011a:11)

以上のように定義をし、またその目的を設定したうえで意義も明確にしたグローバル研究の一環として、筆者はかつて、グローバル化とローカル化が同時かつ相互に影響しつつ進行する

グローバル化の具体的な事例、韓国と日本の海女文化をユネスコの無形文化遺産として登録する運動を記述、分析したことがある。そのなかで、筆者は、韓国と日本の海女文化の生産がグローバル化したユネスコの無形文化遺産保護政策がローカルな場としての韓国（済州島）と日本（三重県）に到達した結果であること、その後の登録運動における協力関係を通して韓国と日本のローカルな人と場所が国境を越えて結びついたこと、さらに登録運動の推進を通して韓国と日本のローカルな場からグローバルな場（ユネスコ）に対して働きかけ（登録運動）を行ったことなどを明らかにした（上杉 2011b 参照）。

この事例は、特定の文化・社会現象（海女文化をユネスコの無形文化遺産として登録する運動）について、グローバルとローカルな現象が同時かつ相互に影響を及ぼしながら進行すること、従ってグローバル研究として分析するのがもっともふさわしいことを明らかにしたものである。なお、この事例の分析から、期せずして、グローバル研究においては、ローカルの人やものの他のローカルの人やものへの、あるいは、グローバルの人やものへの働きかけがきわめて重要であることが明らかとなった点に注意を促しておきたい。

グローバル化を焦点とした上に示したような民俗学的研究は、研究領域を日本国内に限定し、研究対象も日本の伝統的な社会や文化に偏りがちな通常の民俗学とは明らかに異なる。そこで、この種の民俗学的研究を筆者は「グローバル民俗学」と

命名した（上杉 2015、2016b 参照）。筆者はグローバル民俗学の構想を、先に紹介したサラザールやルドメトフらが提唱するグローバル民族誌とはまったく別個に考えたのであるが、記述法や分析法はかなり近似しているものと思われる。

（3）「行為主体」と「働きかけ」

では、筆者らが成城大学グローバル研究センターを拠点にして構想・推進するグローバル研究は、前述のルドメトフらの議論と比べてどういう特徴を持っていると言えるのだろうか。

一つ目として、筆者らのグローバル化の定義は、グローバル化とローカル化が同時かつ相互に影響を及ぼしながら進行すること、すなわち、グローバル化とローカル化の同時性と相互作用性を強調している点が特徴として挙げられる。中でも、グローバル化とローカル化が相互に影響を及ぼすことに言及しているのは、筆者らによるグローバル化の定義の特徴と言えよう。

グローバル化とローカル化の相互作用を明記して定義したのは、すでに述べたように、これまでのグローバル研究が主にグローバルからローカルへの一方的な影響のみを取り上げられてきたことに対する批判である。グローバル化とローカル化が相互に影響を及ぼすことを強調することによって、これまで再グローバル化や逆グローバル化、オルター・グローバル化（もう一つのグローバル化）などとして、言わば例外扱いされてきたローカルからグローバルへの影響を可視化することが可能であ

ると考える。このようなグローカル化の定義は、著しく均衡の崩れたグローバル化の「中心」ないし「起点」としての西洋社会と、グローバル化の「周縁」ないし「終点」としての非西洋社会の間の力関係を、ローカルな立場から「対称化」(均衡化)するためでもある。

以上のことを、グローカル研究の目的や意義とともに改めて検討してみると、筆者らが構想、推進するグローカル研究は、グローバル化が拡散、浸透する場において、ローカルの人やもの(機関や制度)等の行為主体の働きかけに焦点を当てる試みであり、また、ローカルな行為主体がグローバルな人やものに働きかけることによって何らかの影響を及ぼしていることを明らかにする試みと言えよう。そしてまた、そうしたことを通して、著しく均衡の崩れた西洋社会と非西洋社会の間の力関係をいささかなりとも修正、改善している事実を明らかにする試みだとも言えよう⁽¹⁰⁾。

おわりに

本小稿で筆者は、最近刊行されたグローカル化に関する研究概説書、ヴィクター・ルードメトフ著の *Glocalization: A Critical Introduction* (Routledge 2016) の議論と比べながら、筆者らが構想・推進するグローカル研究の理論と方法の特徴をより明確にし、グローカル研究の今後の課題と可能性を予備的

に検討することを試みた。

まず最初に、グローバル（化）という言葉ないし概念の意味や意義を、グローバル化に関する主要な論者であるローランド・ロバートソンとジョージ・リッツァの議論を紹介して確認した。グローバル化を学界に導入したロバートソンの意図は、グローバル化はローカル化と同時に進行するグローバル化に他ならず、従ってグローバル化（＝グローバル化）はローカルの社会や文化を必ずしも均質化させたり消滅させたりするものではなく、むしろ多様化させたり生成させたりすることを明確にするためであった。ロバートソンの議論については、グローバル化（というよりもグローバリズムであるが）の負の側面を批判してやまないリッツァが、グローバル化の負の側面を強調したグロースバル化という造語を提示するなど若干の異論を唱えている。しかしながら、ロバートソンが唱えるグローバル化の考え方そのものに反対するものではなかった。

次に、ルードメトフのグローバル化に関する議論を紹介するとともに検討した。ルードメトフは、グローバル（化）という言葉ないし概念が学界に導入されて20年以上が経過し、グローバル（化）が当初から使われていたビジネス界はもちろん、今や環境問題や地域起こし等のさまざまな文脈で頻繁に使われているにも関わらず、グローバル研究が独自の研究分野・領域として確立されていないことに不満を表明する。そして、彼独自の「屈折理論」からグローバル化という言葉・概念に理論的な

汎用性を持たせ、さまざまな分野、領域でグローバル化に焦点を当てた独自の研究、「グローバル研究」を確立すべきだと主張する。また、グローバル研究の理論と方法を用いた研究としてグローバル民族誌の実践も提唱する。

以上のロードメトフの議論と対比しつつ、筆者らが構想・提唱し、成城大学グローバル研究センターで推進しているグローバル研究の課題と展望を検討した。その結果、筆者らの考えるグローバル研究は、ロードメトフの考えるグローバル研究に比べ、グローバル化の現象・過程のなかで、特にローカルな場における人やもの（「行為主体」）に焦点を当てること、そしてまた、そうした人やものの「働きかけ」に焦点を当てるものであることが特徴となっていることが明らかとなった。さらにまた、筆者らの構想・推進するグローバル研究は、ローカルの人やものの「働きかけ」がグローバルの人やものに影響を及ぼしていることに光を当てようとするものである点の特徴であることを確認した。

筆者らが構想・推進するグローバル研究の特徴は、実のところ、グローバル研究の可能性を示すものに他ならないと考える。従来のグローバル研究が等閑視してきたローカルな場の行為主体に焦点を当て、また、そうした行為主体の働きかけに焦点を当てるグローバル研究は、グローバル化（従ってまた、ローカル化とグローバル化）がますます進行する今日の社会や文化の動態をよりの確に記述、分析する理論と方法となるものと確信

する。

註

- (1) グローカル研究センターは2008年10月に、成城大学民俗学研究所に所属する研究センターとして開設された。その後、2011年4月には成城大学研究機構の第1種研究センターとして独立し、研究領域をより学際的・超領域的に拡張するとともに、研究対象もより国際的かつグローバルに拡大し、現在に至っている（グローバル研究センターのHP、「沿革」参照）。
- (2) センター全体の研究プロジェクトとしては、文部科学省の「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」（研究拠点を形成する研究）として、「グローバル化時代に再編する日本の社会・文化に関する地域・領域横断的研究」（2008年4月～2011年3月）、並びに、「社会的・文化的な複数性に基づく未来社会の構築に向けたグローバル研究拠点の形成」（2011～年4月～2016年3月）を実施した。さらに2016年4月からは、文部科学省の「私立大学研究ブランディング事業（タイプB：世界展開型）」の「持続可能な相互包摂型社会の実現に向けた世界的グローバル研究拠点の確立と推進」（2016年4月～2021年3月予定）の研究拠点として、グローバル研究を推進している。
- (3) グローカル研究センターを開設して以来これまでに、年刊の研究雑誌『グローバル研究』（*Journal of Glocal Studies*）のほか、随時刊行物として研究叢書（*Societies and Cultures in Glocal Studies Series*）、シンポジウム報告書、研究レポート（CGS Reports）、ワーキングペーパー（CGS Working Paper）などを刊行している（グローバル研究センター HP「刊行物」参照）。
- (4) 「2016年度私立大学研究ブランディング事業自己点検報告書」（成城大学私立大学研究ブランディング事業自己点検評価小委員会作

成資料) や「2016年度事業の外部評価および2017年度活動報告書について」(成城大学私立大学研究ブランディング事業推進委員会作成資料) 等における評価。

- (5) 2017年12月9日には、グローカル化に関する概説書、*Glocalization: A Critical Introduction* (Routledge, 2016年) の著者、キプロス大学のヴィクター・ルードメトフ教授を基調講演者に招き、“Theories and Practices of Glocalization Studies in Europe and East Asia” (「ヨーロッパと東アジアにおけるグローカル研究のいま—理論と実践—」) と題する国際シンポジウムを開催した(グローカル研究センターのHP、「News」参照)。シンポジウムの報告書は近々刊行する予定である。また、上記シンポジウムの成果等に基づきつつ、2018年の秋に、より学際的・超領域的かつ規模の大きな国際シンポジウムを開催する準備を進めている。
- (6) ルードメトフ教授のグローカル化に関する「屈折理論」を紹介するに当たっては、著書のほか、教授が2017年12月9日に成城大学で行った講演、“What is Glocalization?: Six Interpretations” (国際シンポジウム、“Theories and Practices of Glocalization Studies in Europe and East Asia” における基調講演) も参考にしている。
- (7) 『日経グローカル・日経BPマーケティング電子版』参照。
- (8) アルファベット標記では *glocalization* は *globalization* と標記と発音の上で明確に区別することができるが、カタカナ標記にすると両者ともに「グローバル化」となり区別できなくなる。そこで、『無のグローバル化』の監訳者・役者である正岡寛司、山本徹夫、山本光子にならない、*glocalization* が *growth* (成長) と *globalization* (グローバル化) の合成語であることから、「グロースバル化」と表記することとする。
- (9) ルードメトフは、グローカル化を分析上グローバル化から独立したものとして定義するために、グローカルから派生した言葉ないし概念を3つに分ける。すなわち過程ないし現象としてグローカル化 (*glocalization*) と、社会的状態または特性としてのグローカリ

ティ (glocality)、そして考え方や主義、行動規範としてのグローカリズム (glocalism) の3つの区分である。

- (10) 筆者らの考えるグローバル研究とルドメトフが構想するグローバル研究には多くの共通点があると思われるが、その目的や意義、従ってまた実際に研究を行ううえでの力点や強調点にはかなりの差異があるものと思われる。

参考文献

[書著・論文等]

上杉富之

- 2009a、「グローバル研究の構想—社会的・文化的な対称性の回復に向けて—」、上杉富之・及川祥平（編）、『グローバル研究の可能性—社会的・文化的な対称性の回復に向けて—』（シンポジウム報告書）、成城大学民俗学研究所グローバル研究センター、14-26頁。
- 2009b、「『グローバル研究』の構築に向けて—共振するグローバル化とローカリゼーションの再対象化」、『日本常民文化紀要』第27輯：(43) - (75) 頁。
- 2011a、「序論—グローバル化と越境」、『グローバル化と越境』、成城大学民俗学研究所グローバル研究センター、3-19頁。
- 2011b、「グローバル化としての「海女文化」の創造—韓国と日本におけるユネスコ無形文化遺産登録運動—」、『グローバル化と越境』、成城大学民俗学研究所グローバル研究センター、85-113頁。
- 2012、「一国民俗学、比較民俗学、そして世界民俗学へ—柳田國男の見果てぬ『夢』」、『現代思想』40巻12号：232-240頁。
- 2014、「グローバル研究を超えて—グローバル研究の構想と今日的意義について—」、『グローバル研究』（成城大学グローバル研究センター）、1号：1-20。
- 2015、「『グローバル民俗学』の構想—柳田國男の「世界民俗学」の今日的展開として—」、『日本民俗学』284号：120-121頁。

(26)

- 2016a、「社会接触のグローカル研究—グローバル化とオルター・グローバルイゼーション」上杉富之（編）『社会接触のグローカル研究』（グローカル研究叢書）成城大学グローカル研究センター、1-15頁。
- 2016b、「『グローカル民俗学』の構想—柳田國男の『世界民俗学』の今日的課題として」上杉富之（編）『社会接触のグローカル研究』（グローカル研究叢書）成城大学グローカル研究センター、157-172頁。
- 小田 亮、2010、「序論—グローカリゼーションと共同性」、小田亮（編）『グローカリゼーションと共同性』、成城大学民俗学研究所グローカル研究センター、1-42頁。
- 細谷龍平、2017、「グローカル化として見たグローカル化—ミームに基づく循環的進化論に向けた試論」、『グローカル研究』No.4：1-20.
- リッツア、ジョージ（正岡寛司監訳）、1999、『マクドナルド化する社会』、早稲田大学出版部。
- （正岡寛司監訳・山本徹夫・山本光子訳）、2005、『無のグローバル化』、明石書店。
- Robertson, Roland, 1992, *Globalization: Social Theory and Global Culture*, Sage Publications.
- Robertson, Roland, 1995, Glocalization: Time-Space and Homogeneity-Heterogeneity, in Featherstone, Scott Lash and Roland Robertson (eds.), *Global Modernities*, Publications, pp.25-44.
- Roudometof, Victor, 2016, *Glocalization: A Critical Introduction*, Routledge.
- Salazar, Noel B, 2010, From Local to Global (and Back) : Towards Glocal Ethnographies of Cultural Tourism, in Richards, Greeg and Wil Munsters (eds.), *Cultural Tourism Research Methods*, CAB International, pp.188-198.
- Tulloch, Sara (comp.), *The Oxford Dictionary of New Words*, 1991, Oxford University Press.

「グローバル研究」の課題と展望についての覚え書き

[インターネット上のウェブサイト]

グローバル研究センター HP 「沿革」

<http://www.seijo.ac.jp/research/glocal-center/history/> (2017年12月27日閲覧)。

グローバル研究センター HP 「刊行物」

<http://www.seijo.ac.jp/research/glocal-center/publications/index.html> (2017年12月27日閲覧)。

グローバル研究センター HP 「News」

<http://www.seijo.ac.jp/research/glocal-center/news/index.html> (2017年12月27日閲覧)。

『日経グローバル・日経 BP マーケティング電子版』

<http://www.nikkei.co.jp/rim/glweb/mokuji/pr.pdf> (2017年12月27日閲覧)。